

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## マグレブ系移民二世世代の女性によるテキストとフランス社会

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 旬子, Takeuchi, Junko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1186">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1186</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# マグレブ系移民二世世代の女性による テキストとフランス社会

武内 旬子

## 1 移民二世世代の女性たちが語られるとき

2005年秋、フランス政府は、アルジェリア戦争時以来の戒厳令を発令して世界を驚かせた。「パリは燃えているか」という表現もメディアに現れ、日本の外務省の危険情報にも注意喚起が掲載された。しかし、燃えていたのは、そして戒厳令の対象となったのはパリではなく、日本からの観光客がおよそ訪れることのない場所、しかしパリからほんの少し離れただけの街の、主に自動車。今回の「非常事態」とは、パリをはじめフランスの大都市郊外に住む若者たちによる破壊行為（主に自動車、また学校やバス停、行政の出先機関などが放火されたこと）だったのである<sup>1</sup>。

フランスのマスコミがセンセーショナルに連日報道する、燃え上がる車。それを見ているフランス市民のほとんどにとって、それはごく近所でありながら「外国」のような場所、バスに乗って行ける所でありながら一生足を踏み入れないだろうと思われる場所でのできごとである。だが、その街に住む人々、車を燃やしている人々を、フランス市民は知らないわけではない。それどころか、何十年も前から毎日自分たちの美しい街の街路を、オフィスを、家庭を、建設し、また清掃してきたのはだれか、もの言わぬ便利な低賃金労働者としてルノーやプジョーの工場で働いてきたのはだれか、よく知っている。その人々や子供たちが、今燃えている街に住んでいることも。

1980年代は、移民労働者の子供たちの世代がはじめて、自分たちの存在をフランス社会に知らしめた時代だった。黙って働き続けた両親と同じよう

---

1 フランスにおける2005年秋の一連の事態については、日本でも議論がおこなわれてきた。『現代思想』誌は、臨時増刊号一冊をこれにあてている。多様な視点からの分析が収録された貴重な文献である。「フランス暴動」、『現代思想』、臨時増刊号、青土社、2006年2月。

に沈黙の中にとどまることを拒否し、フランスに生まれ、フランス共和国の教育を受けて育った、十全なフランス市民として認めてほしいという希求が、1983年の「ブールの行進」やSOSラシズムなどの運動の基底にある。周知のようにフランスは国籍に関して血統主義とともに生地主義の原則を併せ持っているため、これら移民二世世代は基本的に「フランス国民」であることにおいて他のフランス人と変わらない。しかし現実には、半ばゲットー化した郊外の低家賃大規模団地に住むこれらの若者たちは、その多くがマグレブ（北アフリカ）およびブラックアフリカ出身の親から生まれた子供たちなのだが、他の地域より高い失業率に苦しみ、社会的上昇の道を閉ざされ、差別と社会的排除にさらされていることを訴え始めたのである。それから四半世紀。燃える郊外は、問題は解決に向かうどころか、むしろ悪化していることをフランス社会全体に向けて知らせる狼煙のようでもあった。

ところで、この「暴動」の担い手の若者たちといっても、その圧倒的多数は男性である。移民の子孫たちには当然男性も女性もいるのだが、今回の事態に関していえば、差別が告発にされるにせよ、暴力が批判されるにせよ、女性が問題とされることはなかった。フランス社会が移民二世世代に対して抱くイメージは、実は、男性と女性でかなり異なっている。暴力的で反社会的な男性に対して、従順で学校の成績もよくまじめな女性という対立の図式で語られることが多い。一方、80年代以降の反差別運動には女性の参加者も少なくなかったが、女性独自の問題が取り上げられることはほとんどなかった。

しかし、今日、二世世代の女性たちが語られないわけではない。それどころか、男性とはまた別の「危険」をはらんだ存在として注目を浴びているといってもよいだろう。2004年に法制化の対象になった公立学校におけるヴェール着用問題がその典型である。この文脈では、二世世代の女性たちは、移民という親の社会的カテゴリーでも、民族的出自でも、居住地域でもなく、イスラム教徒という宗教的枠組みでとらえられている。「テロとの戦争」が問題になり、イスラム教徒が多い移民二世世代がテロリスト予備軍であるかのごとく語られるようになるまで、男性が宗教と関連づけられることは少なかった。それに対し、ヴェール問題は1989年以来、何度かフランス世論が注目するところとなり、9・11以来のイスラム恐怖の流れの中で、公立学校での

着用を、法律をもって禁止するという事態にいたった。スカーフを被った少数の少女たちが、フランス共和国の根幹を脅かす存在として語られることすらあったのである。

さらに、2002年の大統領選挙では、フランス社会の不安を反映して、治安悪化が選挙戦最大の争点となっていたのだが、そのころから、移民家族の集住する郊外の団地における集団強姦がメディアでとりあげられるようになる。この年にはまた、こうした強姦からのサバイバーであるサミラ・ベルルの『輪姦の地獄のなかで<sup>2</sup>』が出版され大きな反響を呼んだ。この問題に関する報道や議論の中では、移民二世世代の女性たちは、「同胞」男性による犠牲者として語られていく。

ところで、当事者たちは、自らをどのように語ってきたのだろうか。

移民二世世代の女性たちが対象となる時、フランス世論は熱くなる。同じ社会的カテゴリーの男性をめぐる議論より「情念的」になる傾向がある。マスメディアはセンセーショナルに「証言」を取り上げ、一方そうした方法を批判する言説にも事欠かない。そしてそれらの言説のほとんどは当事者の女性たちによるものではなかった。後述するように、近年この女性たち自身による大衆運動が始まった。と、たちまち、それに対する批判も現れる。

本論では、この「熱い」議論の起こるずっと以前に、話題にもならず議論もされず、ひっそりと書かれ発表されてきたテキスト、当時「見えない」状態におかれていた女性たちによる自伝的テキストのいくつかを取り上げたい。当事者たちが、「静かに」何を書いてきたのかを知ることは、錯綜した現在の議論を別の視点から見直すための一助になるのではないかと考えるからである。

対象となるのは、フランスで生まれ育ったか、幼少時にフランスに移ってきたマグレブ系女性によってフランス語で書かれ、1986年から2002年にかけて発表された10の作品である<sup>3</sup>。うち一つには、マグレブ系以外の共著者、

---

2 Samira BELLIL, *Dans l'enfer des tournantes*, Denoël, 2002. なお、本論では2003年版 (Gallimard) を用いる。

3 本論では著者自身がここにいう二世世代に属する場合に限った。従って作品にその世代の登場人物も多いのだがレイラ・セパール (1941年アルジェリア生まれで成人するまでアルジェリアで育った。父はアルジェリア人、母はフランス人) は対象としなかった。

もう一つには同様の援助者の名が明記されている。自伝あるいは自伝的テキストのどこまでが「事実」なのかということ判定することは本論の目的とするところではない。ただ、移民二世世代の女性たちが、自分たちと似た境遇あるいは社会的カテゴリーに属する女性たちを語り手および主人公にして書いた一群のテキストがたしかに存在する時、それらを、広い意味での当事者による自己語りと見なすことは可能でもあり、また必要であると考え。もちろん、フィクション性が問題になる時は必要に応じて論じていく。

1980年代は、移民二世の大衆運動が現れると同時に、その世代の書き手による「ブル<sup>4</sup>文学」が発表され始めた時代でもあった。代表的作品の一つメフディ・シャレフの『アルシ・アフメドのハーレムでのお茶<sup>5</sup>』の出版が83年である。このカテゴリーに入るとされる作家の中で最もよく知られるようになるアズズ・ベガグ<sup>6</sup>も同時期に書き始めている。女性の書き手も少し遅れて現れる。本論でも取り上げるケサスは『ブルズ・ストーリー』を以下のような献辞で始めている。

私はこの物語を、マグレブ出身の姉妹たちに捧げる。私たちが、若いマグレブ系作家たちの小説の背景にうごめく、どうでもいい存在であることをやめるために<sup>7</sup>。

この献辞の意味を探ることを含め、これらのテキストから抽出できるいくつかのテーマを、「家族物語」および「アイデンティティ」の軸にそって第2章、第3章で分析した後、第4章において、上述したような、現代フランス社会におけるこの女性たちをめぐる言説を再検討することにしたい。

## 2 「私」と家族の物語

---

4 “beur” 主にマグレブ系移民の二世世代が自称に用いたとされ、その後一般のフランス語の中に定着した表現。諸説ある起源については Michel LARONDE, *Autour du roman beur*, L’Harmattan, 1993 に詳しい。

5 Mehdi CHAREF, *Le thé au harem d’Archi Ahmed*, Mercure de France, 1983. 題名は「アルキメデスの原理 (le théorème de Archimède)」という表現を耳にした二世世代の若者が自らの文化的バックグラウンド (マグレブ、イスラム) にひきつける形で理解したことによる「誤解」による。

6 Azouz Begag は社会学者であり、ヴィルパン内閣に機会均等担当大臣として入閣している。

7 Ferrudja KESSAS, *Beur’s story*, L’Harmattan, 1994, p.7.

## 2-1 分類と共通項

最初に、取り上げるテキストの特徴について整理しておきたい。全てが自伝的要素を色濃く持っている。作者—語り手—主人公が一致する「自伝契約」を整えているかそれに近い自伝的物語（大筋において子供時代からの時間的経過を追う物語、もしくは一定の出来事についての体験談）が5<sup>8</sup>、そうした物語の形はとらない自伝的エッセイが1<sup>9</sup>、フィクションが4と一応は分類できるだろう。ただし、フィクションのカテゴリーには、表紙に小説と明記されたものが一つ<sup>10</sup>、ある事件をもとにしたフィクションと印されたものが一つ<sup>11</sup>、内容からフィクションと考えるのが妥当なものが一つ<sup>12</sup>、自伝的物語にきわめて近いが三人称の語りで契約が明白でないものが一つ<sup>13</sup>と、多様性に富んでいる。

著者に関する情報<sup>14</sup>から分類すれば、1949年生まれの子ジュラを除き著者は

- 
- 8 これら6つのテキストのうち、仮名のもとでの証言である旨が明記されたのが Aïcha BENAÏSSA et Sophie POUCHELET, *Née en France. Histoire d'une jeune beur*, Payot, 1990 (Press Pocket 1994) 自身の物語をもとに書かれたと明記されたのが Soraya NINI, *Ils disent que je suis une beurette*, Fixo, 1993 (Press Pocket 1994). (“beurette”は“beur”の女性形。ただし、女性形はあまり用いられず、またこの形に限るものでもない。“beur”については前注参照。) また以下の4つでは著者、語り手、主人公の一致が主張される。 BELILL, op.cit. Sakinna BOUKHEDENNA, *Journal 'Nationalité: immigré(e)'*, L'Harmattan, 1987. (ここでの「移民」は“immigré(e)”というかたちで、男性形、女性形の両方で記されている。) Djura, *Le voile du silence*, Michel Lafon, 1990 (Livre de poche 1994) Martine EL NOUCHI, *Khadija*, Atlantica, 1998
- 9 Souâd BELHADDAD, *Entre-deux Je. Algérienne? Française? Comment choisir...*, Mango Document, 2001.
- 10 Tassadit IMACHE, *Une fille sans histoire*, Calmann Lévy, 1989.
- 11 Fawzia ZOUARI, *Ce pays dont je meurs*, Ramsay, 1999 (Press Pocket 2001).
- 12 Farida BELGHOUL, *Georgette!*, Barrault, 1986. なおこの作品については別の論考で詳しく分析した。武内句子 「異なるものの名 フェリーダ・ベルグル『ジョルジェット!』とモニック・ヴィティッグ『オポポナクス』」『外大論叢』第48巻第4号 1997年9月。
- 13 KESSAS, op.cit.
- 14 主に裏表紙など各テキストに印された情報の他 Jean DELEUX, *La littérature féminine de langue française au Maghreb*, L'Harmattan, 1994, の著者一覧による。生年が確定できない場合もあるが、自伝的内容から勘案すると、ほぼ上記のように考えられる。

50年代後半から70年代初頭の生まれで、20代、30代で出版している。またタサディ・イマシュはアルジェリア人の父とフランス人の母をもち、ズアリはチュニジア出身で、他のほとんどはアルジェリア人の両親から生まれた<sup>15</sup>。これらの著者のうち、本論が対象とする以外に複数の作品を発表しているのはイマシュ、ズアリの二人である。ジュラはシンガーソングライターとして活動中であり、ここでとりあげた自伝的テキスト以外にも出版物がある。複数の作品がある場合は、フランスにおける二世世代の女性がどのように自らを語ってきたのかという本論の問題設定との関連で選択を行った。

ケサスのそれを除くすべてのテキストが一人称の語りという形式をとっていることその他、顕著な共通項として指摘できるのはこの語り、家族の物語という面を強くもっている点である。言い換えれば、語り手の「私」はほとんど常に家族関係の中におかれ、それに強く制約される存在として書かれている。比較的若い著者の自伝的テキストである以上当然なのだが、中心となるのは語り手の子供時代および思春期の物語、さらに両親の来歴に関わる物語である。また、ほとんどのテキストにみられる強い閉塞感も指摘しておかねばならない。肉体的・心理的暴力が描かれることも少なくない。また多くの場合、これらの自伝的物語は、語り手の「苦痛」の物語であると言える。（もちろん喜びや希望といった要素が全くないというのではないが。）「苦痛」の内容は一つではないが、語り手に対する家族および周囲の抑圧や暴力によって引き起こされるものと、二世世代としてのアイデンティティ形成に伴うものとに分類することが可能である。次節では前者を、第3章では後者を検討していきたい。

## 2-2 家族の中の「受難者」としての「私」

なぜ、これらのテキストの多くが語り手—主人公を受難者の立場におくのだろうか。それにはまず、先に指摘した閉塞感を分析する必要がある。これらの自伝的物語を読んでいくと一つのパターンが容易に見えてくる。比較的自由な子供時代から、きわめて抑圧的な思春期への急激な移行である。これ

---

15 両親の出身国についても前項の生年の場合と同様の情報による。EL NOUCHI に関しては明確ではないが、父方の先祖の出身地がアルジェリアである旨が文中で表明される。

は、最年長1949年生まれのジュラのテキストにおいても、20才以上年少のベリルのそれにおいても、ほとんど変わらない、苦痛を伴う体験として書き込まれている。およそ11才から13才ほどの年齢で女兒は一挙に「若い女性<sup>16</sup>」になる。具体的には、両親および兄弟（主に兄だが弟の場合もある）による行動の管理、外出の制限、家の外での言動の監視、家事負担の増加などである。その根拠にあるのは、女性を何より性的存在とみなす考え方に他ならない。ベナイサの『フランスに生まれて』は、語り手の母が毎日、語り手が家を出る際に必ず繰り返す文章（「男の子には気を付けるんだよ<sup>17</sup>」）から始まる。あまりに繰り返されるため、語り手の頭にこびりつき、「ついには、それといっしょに生きることを身につけた<sup>18</sup>」という言葉である。たとえば「車に気を付けよ」、という時危険なのは車の方であろう。「男の子に気を付けよ」、という表現も一見、男の子は危険だから気を付けよ、という意味にとれる。しかし、我々のテキストが浮かび上がらせるのは、本当に危険なのは女の子（結婚前の女性）の方だという観念とそれが支配する環境である。結婚前に男性とのいかなる関係も持ってはならず、そのような噂をたてられてもならない、家族の名誉は娘の処女性（それ自体およびその評判）にかかるという価値観がある時、結婚前の女性は、家族の名誉を危機に陥れる可能性のある危険な存在なのだ。「これをしてはだめ、あれをしてはだめ、ってあんまり繰り返し聞かされるものだから、しまいには殻をつくってかぶってしまって、いざ脱ごうとしても駄目、化石みたいに体に張り付いて、もう、石と動物の区別もつかなくなる<sup>19</sup>」というほどに女性の行動を規制・管理するのも、女性の持つ、この危険性故である。性的存在であることを強調されると同時に、性的存在であることを禁止される、その矛盾のただ中に我々のテキストの「私」たちは、ある時点を境に一挙に投げ込まれ、そこにとどまることを要求される。語り手—主人公が7才という設定であるベルグルの『ジョルジェット！』にはこの種の問題が出てこないことから、このあたりの事情がうかがえる。

---

16 BELLIL, op.cit.,p.66.

17 BENAÏSSA, op.cit.,p.15.

18 ibid.

19 KESSAS, op.cit.,p.118.

ところで、家族の中で外出を禁止され、厳しく言動を監視されるのは娘だけであり、息子たちにはこういった規制は全くない。ダブルスタンダードはしかし思春期に始まるのではなく、生まれた時から貫徹している。

私はよく、男に生まれなかったことを残念に思う。男の子たちは生まれる前から王様で、私たちときたら、生まれた時から召し使いなんだから。一体誰の、何の名において、男の子よりつまらない存在だなんていう位置が私たちに与えられるんだろう。彼らが一体私たち以上の何を持ってらるっていの。

毎日私は家で、この不公平を感じている（後略）<sup>20</sup>。

外出を制限されるだけでなく、娘たちは、息子たちには一切要求されない家事を黙ってこなし、両親だけでなく兄弟たちの命令に従い仕えることを求められる。語り手たちがいなく閉塞感、単に生活空間が家と学校に限定されるということだけではなく、この不公平感によって強められているのである。

兄弟との関係は、これらのテキストを読む際の重要な要素の一つであるが、姉妹に対する実効支配にはしばしば肉体的暴力が伴う。ジュラの語り手のように「私にまっすぐな道を歩ませる役目を負ったのは兄<sup>21</sup>」であり、その具体的手段は暴力である。ここでは暴力は家庭内のできごとにとどまらず、後に語り手の弟は彼女とそのパートナーに対する暴行で逮捕され、有罪判決を受ける。ソラヤ・ニニの語り手はテキスト上、兄をKGBと呼ぶが、この呼称は、監視や暴力といった兄による抑圧の性質を端的に表現している。面と向かっては逆らえない語り手は、こっそりこう命名することで、部分的とはいえ、兄の支配からの心理的解放を試みているといえるだろう。失業中のこの兄に比べ、ケサスの兄は一家の支えであるが、それは姉妹への暴力的支配という構図をいささかも変えない。興味深いことに、ニニとケサス、双方のテキストとも、最も暴力的な長兄に対し、姉妹に対して多少とも理解を示したり、時として長兄の理不尽な暴力から彼女たちを守る次兄が存在する。しかし、これもまた共通するのだが、この次兄は結局、男性であることの特権は十分に享受した上で家族から逃避し、最終的に姉妹の保護者の役割は果

---

20 NINI, op.cit., p.191.

21 DJURA, op.cit., p.44.

たさない。

これらの家族物語における「兄」を考える時忘れてならないのは「父」のあり方である。兄の暴力が顕著なニニとケサス、さらにズアリ（娘のみで息子のいない家族）においても、父はむしろ弱者である。ニニの場合は結核、ケサスでは足場からの転落、ズアリでも工場内の高所からの転落により、父は働けない状態にあり、家族内で常に家父長として安定した力を持っているわけではない。本論の10の対象テキスト中、転落事故が「二件」なのは偶然なのかもしれないが、シャレフの『アルシ・アフメドのハーレムでのお茶』でも、主人公の父は、テキストの最初から、屋根葺きの仕事で転落し知的障害を負った人物として登場し、息子は、常に責任を果たすわけではないにせよ、障害のある子供に対する親のように父に対応する。「失墜」した家父長。移民家族における両親、とりわけ父の権威喪失の問題を、転落事故という象徴的「フィクション」のかたちで<sup>22</sup>書き込んでいると考えることは十分に可能であろう。

父と娘の関係は我々のテキストにおいても単純ではない。ケサスの父は娘への暴力もあるのだが、その娘にとって父は、深い愛情の対象でもある。娘が図書館で見つけてきたアルジェリアの写真集を前に、彼女に向かってアルジェリアを熱く語る父<sup>23</sup>を描くことは、故郷を離れ、けがをして失墜した父という立場から、一時的にせよ、「知る者、語る者」として復権させる方法ではないだろうか。ここでは、娘には、「名誉の名のもとにあまりに多くのことを禁止する<sup>24</sup>」父の「失われた尊厳<sup>25</sup>」に思いをはせる余裕がある。ズアリの場合、語り手は、自分は家族で唯一父のまなざしの意味を理解できると考えている。母や妹ではなく「私に、彼の目は語りかけていた<sup>26</sup>」とする語り手は、事故後の体が不自由になった父にも寄り添い続ける。

ベナイサでは、最初、フランスに生まれ育った語り手を、イタリア系男性

---

22 ケサスのテキストは上述のように本論の対象のうち唯一、一人称の語りを持たず、主人公は著者と名前が異なる。どこまでが自伝的事実なのかは判別不能である。ズアリの場合、ある事件に題材をとったフィクションと明記されている。その2作で父の「転落事故」が起きている。

23 C.f. KESSAS, op.cit., p.46.

24 ibid., p.47.

25 ibid.

26 ZOUARI, op.cit., p.51.

とつきあい始めたことを理由にアルジェリアに送り、そこに軟禁させたとして父は憎悪の対象になるが、やがて、この首謀者は父というより祖母（父の母）であることがわかるにつれ、本当は娘を愛していないわけではない父、というかたちでそのイメージは多少改善される。イマシュの小説は、父の死後、自分のことを何も語らなかったこの人物の過去を探り、同時に自らのアイデンティティを問うていく物語だが、幼い頃の密接な関係から後に生まれる憎悪まで、父と娘との関係には幅がある。ニニの場合、働いていないとはいえ、父の権威は完全に失墜しているわけではなく、娘の行動管理や暴力についていえば立派に「現役」なのだが、その父を肯定的にとらえた箇所も存在する。「私はこの時（祈りの時）の父を見るのが好き。サルアルをはいて白くて長いジュラバを着た父は、美しくて思慮深く見える<sup>27</sup>」と、ホスト社会で低い地位にある移民としての父が、イスラム教徒としての姿において復権される。また、イマシュとベルグルに見られる、移民先で子供を持つことについての否定的評価も指摘しておかねばならない。子供たちは「彼（父）にとっては向こう（アルジェリア）でしか醒めることのない悪夢にすぎない<sup>28</sup>」とイマシュの語り手は述べ、ベルグルの父は「本当のことをいうと、ここのめちゃくちゃのなかじゃ、子供はいらなかったんだ<sup>29</sup>」と嘆く。この二カ所とも子供は娘に限られてはいない。ベルグルの語り手は学校というフランス社会で認められようとする努力が「父の娘」であることの否定にはならないことを必死で訴える。

ベリルの語り手は父を、言葉よりも暴力によって娘との関係を築いてきたと回想するだけでなく、集団強姦の犠牲となった娘を「汚れた者」として徹底的に拒絶する姿で書いている。事件の発覚後、「私の父は私に話しかけなればかりか、殴ることすらしなくなった、私に触れなくなかったのだ。彼の目には、私は汚らわしすぎたのである<sup>30</sup>」。後に父は語り手を家から追い出

27 NINI, op.cit.,p.72.

28 IMACHE, op.cit, p.84.

29 BELGHOUL, op.cit.,P.153.

30 BELLIL, op.cit., p.101. この父はまた、語り手がごく幼いころ、犯罪を犯して服役していた。他にも、「逮捕歴」のある父は存在する。だが、ジュラでもイマシュでも、それらはアルジェリア独立戦争に関わるもので、ベリルの場合のように、一般的な犯罪の結果ではない。兄弟の非行・犯罪行為については多くのテキストに

して顧みない。強姦の犠牲というかたちであるにせよ、娘が「性的存在」である事実に直面するよりは、その存在自体を抹消しようとするこの態度は、誕生の時点から喜ばれない娘の、家族内での「受難」が取り得る極限のかたちの一つかもしれない。

家族関係のもう一つの重要な側面をなすのはいうまでもなく母と娘の関係だが、我々のテキストにおいては、父-娘関係より見て取りやすい構図を持っているように思われる。すなわち、各テキストに顕著な共通点を指摘できるのである。一つは、母の息子に対する偏愛、もう一つは娘の、母と同様の人生を歩むことへの拒絶の表現である。娘を拒絶するのは父に限ったことではない。ジュラの場合、語り手の母は彼女を生んだ時、3歳半だった長男に乳を与え続けるためとして娘に授乳することを拒否し、娘は別の女性に育てられることになる<sup>31</sup>。たしかに、このように極端な例はこれ一つであり一般化はできない。だが、息子偏愛のモチーフは無視するのが無理なほど繰り返し現れる。先に述べた、性別ダブルスタンダードによる教育は、母による息子の偏愛と相まって語り手たちの不満を生み出すのである。

しかし、そのこと以上に娘たちにとって重要なのはむしろ、母と同じ人生を歩むのかという問題の方である。「女であるということは、それが許すことよりも禁止することの方がずっと多くなってことに私は気づいている<sup>32</sup>」という思春期以降の娘に対する教育は、しかし母をモデルとしている。フランスで生まれ育つ娘が、アルジェリアで生まれ育った母と全く同じになり得ないことを知る、あるいはその現実を認めない母たちは、同じ道を歩むことに難色を示す娘たちを前に苦悩する。娘の学業に関しては、肯定的な場合（たとえばニニ）も否定的な場合（たとえばケサス）もあるが、たとえ肯定的でも、学業の先にあるものは母たちの想像の範囲を超えるためか、母たちは思春期の不安な娘たちに希望を与えるような展望、あるいは援助をもたらすことができない。モデルに従わない娘は「娘」でないと解釈するしかない。

お前は男の精神を持った娘だよ、それ以外ありえない。お前は男のよう

---

言及があるが、父に関してはベリルのみである。なお、ベリルは自身の「非行」（万引き、麻薬使用など）に関しても率直に述べている。

31 c.f. DJURA, op.cit., pp.24-25.

32 NINI, op.cit., p.96.

に生きてがるけれど、お前は娘に生まれたんだよ、サミラ<sup>33</sup>！

これらのテキストの強い閉塞感は、すでに述べた要因に加え、この、しばしば夫との関係もうまくいかず、息子にしがみついた疲れた専業主婦である母と同じ道を歩む以外ないのかと問う娘たちの、将来が閉ざされているという絶望感にも起因している。

こうした閉塞状況と、語り手たちはどのように渡り合い、そこから脱出しようとするのだろうか。なぜなら、語り手たちは家族の中の「受難者」の位置に甘んじてばかりいるのではないからである。

総じて、これらのテキストの「結末」は明るくない。文字通り、外へ向けての出発という形で希望を示唆して終わるのは、学業はだめでも前向きな語り手が「娘の願いを理解することのできない<sup>34</sup>」母を振り切って、自分で選んだ研修に出かけるニニの場合に限られる。ベナイサの場合、軟禁状態からの脱出と恋人との結婚という「ハッピーエンド」に違いないのだが、軟禁という手段を講じてまでそれを阻止しようとした家族との完全な和解のもとにあるのではない<sup>35</sup>。ジュラも同様、音楽活動の成功や自ら選んだパートナーとの生活など成功譚の側面もあるが、最後まで、彼女が自立あるいは離脱することを望まない家族との泥沼のような確執が終わりを告げることはない。

ベリルは、成人する以前に家を出るわけだが、彼女を受け入れるのは暴力や敵意に満ちた厳しい「路上」の放浪生活（文字通りの路上から、友人宅、施設など）であり、彼女のテキストからは、「家（族）の外」に位置する娘が今日のフランスで直面する仮借ない現実が見えてくる<sup>36</sup>。家の外に位置するのはもう一人、サキナ・ブケデンナだが、彼女の『国籍、移民』は、我々のテキストの中で最も家族物語の側面が希薄であり、語り手はテキスト上ほとんど単独で行動する。そして、彼女の「放浪」もまた、ベリルと同様、肉体的・心理的暴力にさらされる。

---

33 Ibid., p.269.

34 Ibid., p.282.

35 家族からの報復を恐れてのペンネーム出版である旨が共著者の後書きに書かれている。BENAÏSSA, p.137.

36 ベリルの場合、語り手は様々な暴力の犠牲者であると同時に、受けた暴力への反応としてか、自らも他者に対してかなり攻撃的であり、語り手自身もそのことに言及している。

そして、フィクションに分類した4作のうち3作までが<sup>37</sup>、死で終わっていることは注目に値する。ケサスの場合、テキストの終わる直前、主人公は帰宅途中、久しぶりに同級生の一人に会う。その友人は家族との確執から学校をやめ、主人公とも疎遠になっていたのだが、もうすぐアルジェリアに行くと言って主人公と別れる。その直後、帰宅した主人公は、その友人がすでに死んでいたこと、家族によってアルジェリアで結婚させられることになって自殺したことを知る。テキストは、それを聞いて失神する主人公で終わっている。脇役とはいえ主人公に近い二世世代の女性が、死に至る受難の例となっているのである。

ベルグルの『ジョルジェット!』は、最後、学校を抜け出した語り手—主人公が車にはねられ、意識のなくなっていくのに合わせるかのように、文章が中断する形で終わる。ズアリの『死ぬほどのこの国』は、「私」の一人称と、「あなた（語り手の妹）」という二人称の語りとが混じり合ったテキストだが、「私」は「あなた」の緩慢な自殺に寄り添い、「あなた」の死後、一人称の語りの限界ぎりぎりのところで「私」の死が示唆されて終わる。

フィクションでこそ可能な死の表現ではあるが、閉塞状況からの解放はついに死によってしかありえないというのだろうか。しかし、これらのテキストすべてが、強度に差はあれ閉塞状況を生てきた女性によって書かれたという事実は、「家の外」へと展望を開くことが、まさに書く（たとえ、それを試みた者の死というフィクションであっても）ことによって可能となったのだということもまた意味しているのではないだろうか。この点に着目してこそ、これらのテキストを読む意義があるのではないかと考える。

### 3 「私」を問う枠組み — 「私たち」／「私」／「彼ら」

前章では家族の中の「私」を論じてきたが、その「私」は当然、家族の構成員との間だけでなく、家族を取り巻く社会とも関係を持つ。二世世代のアイデンティティ問題という時、文化衝突を云々する前に、移民や二世に限ら

---

37 残る一つイマシュの場合、ルーツを求めてアルジェリアへ出発しようとしていた語り手が結局その試みを放棄するところで終わる。

ず、アイデンティティとは自己完結するものではなく、「他者」との関係において形成され、絶えず変化していくものだということを想起しなければならない。その上で、これらのテキストの書き手たちが「私」とはだれかを問う時の独自の枠組みを考えていくことにしたい。

両親の出身地と書き手の育った土地との乖離という要素は、たしかに我々のテキストの特徴をなしている。その中でも、ブケデンナは、二世世代という「レットル」をきっぱり拒否する唯一の例として際だっている。語り手はアルジェリア人の両親からフランスで生まれ育つが「私は東洋人であり、アラブ人だ<sup>38</sup>」「人は私がもうアラブ人ではなくて二世世代に属しているという。いいえ！私は拒否する。私はアルジェリア人<sup>39</sup>」といったストレートな表現は他のテキストには見られない。フランスに対する憎しみの表現も激烈であり、フランスに肯定的要素をほとんど全く認めないという点でも特異である（後述するように、現実のアルジェリアは語り手の期待に応えるものではない）。その他の書き手たちは、どちらを選ぶか、あるいは選ばないかという問題についてはるかに慎重である<sup>40</sup>。

我々のテキストでは、「私」のアイデンティティの問題は、「私たち」のそれと切り離せない。移民家族出身の彼女たちを、ホスト社会のマジョリティはまず「彼ら（移民）」として認知するからである。「私たち」（家族、あるいは移民社会）の方でも、「私」に「私たち」に同一化するよう求める。この、どのように「私たち」であり続けるべきか、という点において、二世世代の性差は大きな意味を持つのである。「どんなにばかなことをしでかしても、親たちは男の子を崇拜し続ける<sup>41</sup>」のに対し、娘の行為、とりわけ、性的規範に関わる行為ははるかに厳しい規制と非難の対象になる。息子たちの非行や犯罪、逮捕や入獄といったできごとが、家族に打撃を与えないわけではない。しかし、それらは、「外」の世界のできごと、「外」からくる攻撃あ

---

38 BOUKHEDENNA, op.cit., p.67.

39 ibid., p.68.

40 なお、エル・ヌシのテキストは紀行文ということもあるが、フランスに関する記述がほとんどなく、モロッコを旅しながら、地元の人々との交流を通じ、父祖の地であるアルジェリア（特にトレムセン）をロマンチックなあこがれの対象として描いている。

41 KESSAS, op.cit., p.151.

るいは不幸であり、回復可能である。それに対し、娘の行為は家族内で処理すべきことであり、回復がより難しい。スアド・ベルハダッドは、従姉妹から、イギリス人と恋に落ちた若い女性が家族に毒殺されたエピソードを聞かすが、それに対するお婆の反応をみて、「私たち」が要求するものを理解する。お婆にとってそれは当たり前なのである。

これが私たちの母親と、友人たち（フランス人）の母親との違いなのだ。前に言ったように、友人たちの母親だって伝統的で保守的なことに変わりはないのだが。娘についての暗黙の生殺与奪の権利<sup>42</sup>。

ここで強調しておかなければならないのは、我々のテキストにこのようなエピソードがあふれているわけではないということである（この話もアルジェリアでのできごとである）。ただ、これらのテキストからは、語り手たちが、極端な場合にはそこへと至る可能性もある規範の圧力、暗黙の、いちいち言語化される必要もない圧力のもとにあると自覚していることが読み取れる。興味深いのは、この自覚がただちに、圧力をかける「私たち」、その代表ともいえる親たちに対する非難につながるわけではないということである。前章で述べたような反発を感じつつも、「彼ら（両親）は、フランスに来ることを受け入れるだけですでに、家族や友人、習慣を犠牲にして無理をしてきたのだ<sup>43</sup>」という一節に代表されるような、親たちの困難、自分たちの価値観と異なるコンテキストで子供を育てる困難への理解を示す語り手も多い。ベルハダッドの次の問いかけは、こうした二世世代の女性たちの葛藤を表すものであろう。

時として私は自問する、急ぎすぎたのだろうか。

もし、鎖を断ち切るには一世代では少なすぎるのだとしたら。

罪悪感と反抗の間を揺れ動く私の人生の大半は、この問い、宇宙と同じくらい大きい問いにさいなまれてきた。（中略）

一体私にはその権利があるのか？（中略）私には、「私」というために「私たち」から自分を切断する権利があるのか。それは、自分の出自を裏切ること、グループから離れたいと望むことではないのか<sup>44</sup>。

42 BELHADDAD, op. cit., p.25.

43 KESSAS, op. cit., p.221.

44 BELHADDAD, op. cit., pp.28-29.

母を最上のモデルとしてそれを繰り返さない娘は「裏切り者」なのである。これは必ずしも、性的規範の問題だけではない。ここでベルハダッドが述べていること、さらには、閉塞感に押しつぶされそうになりながらも我々の語り手たちが表現しようとするのは、性的行動の自由だけでなく、人生を選択する自由、一人の「私」として生きたいという希求なのである。しかし、ここでもまた、女性は男性以上に「裏切り者」の非難を受けやすい。息子たちがフランス人とつきあっても結婚しても、喜ばれはせずとも受け入れられる<sup>45</sup>のに、娘がイタリア人とつきあえば、殺さないまでも娘をだましてアルジェリアに行かせ、そこで軟禁する必要がある（ベナイサの場合）というように、パートナーの出身をめぐっても、男女で「裏切り度」は異なるのである。植民地支配下のアルジェリアで、フランスによる社会的・文化的攻撃から「民族」を守るために、女性に対する管理がより強化されたと言われるが、移民社会にも同様の構造があり、「私たち」への同化圧力は女性の方に強く働くことを、これらのテキストは様々に表現している。そして、その力が強いからこそ、自分は裏切り者ではないのかという苦渋の問いもまた深くなるのである。

また、二世世代が「私」を問う際に、親の出身地との関係が重要な要素となることがある。そしてこの点についても、二世の性別は無関係ではない。ベナイサのアルジェリア体験は女性でなければありえない。ジュラはアルジェリアで生活するようになってから、兄がいつそう「マッチョ」に変化したことを述べているが、後にこの変化は語り手に対する暴力や軟禁<sup>46</sup>へと発展する。ケサスでは、語り手の友人は結婚のためにアルジェリアへ向かう直前に自殺する。

最もアルジェリア性を主張するブケデンナは、同時に最も直裁にアルジェリア社会の一面を断罪する。フランスでの人種差別に怒りを燃やし、「祖国」へと向かった語り手を待っていたのは、「良い女とは、姉妹、性を持たない母であり、女とは売女だ<sup>47</sup>」という価値観のもと、女性を閉じこめて管理し

---

45 ケサス、ジュラなどにその例がある。

46 ここでも、軟禁の理由は性的管理に他ならない。疑いを掛けられた相手はフランス人である。

47 BOUKHEDENNA, p.91.

ようとする社会である。その上、語り手によると、アルジェリアの男性にとって、フランス育ちの移民の女は「売女」に他ならない。語り手は生活の様々な場面で「売女」扱いされ、警察も、こうした暴力から保護してくれるどころか、彼女をそれとみなす<sup>48</sup>。「私の国、私の根、私の土地に嘆願する。私にアラブ語でしか話しかけないでほしい、この穢らわしいフランス語、私を押しつぶす植民地の言葉を忘れるために。覚えたアラブ語の一語、忘れたフランス語の一語、これが私の仕事の新しい基礎だ<sup>49</sup>」という思い入れは「イミグレ（移民）、イミグレ、売女<sup>50</sup>」という罵倒で迎えられるのである。

フランスではブニユル<sup>51</sup>、アルジェリアでは売女、フランスではファトゥマ<sup>52</sup>、アルジェリアではイミグレ<sup>53</sup>。

語り手が至る苦い認識がここに集約されている。祖国に対する幻滅は、フランスに対する憎悪もますます強め（自分がこのように扱われる「イミグレ」となったのもフランスのせいなのだから）語り手は自らを亡命者としてテキストを終えている。

ところでブケデンナの場合、語り手自身は移民という社会的カテゴリーこそが問題なのだともみているが、何よりもこの語り手は、すでにフランスで、家族の枠をきらい、個人として単独行動する人物である。単にフランスから来たということだけでなく、個人として振る舞う女性であることが、様々な軋轢をもたらしているように思われる。たとえば、ズアリでは、母親と共に帰省する語り手たち姉妹は村の子供たちから「フランス人のところへ物乞いに行ったやつら<sup>54</sup>」というからかいを受けることはあっても、ブケデンナのような経験はしない。ここではむしろ、「誰一人礼もいわない<sup>55</sup>」贈り物を

48 ベリルにも、アルジェリアで強姦の被害にあった後の警察の対応がセカンドレイプに等しいことを批判する箇所がある。C.f., BELLIL, op.cit., pp.134-136.

49 *ibid.*, p.84.

50 *ibid.*, p.85. 「売女」の部分のみアラブ語表記 (Quahba) で仏訳がつく。「イミグレ」はフランス語表記。

51 アラブ人を意味する差別語。

52 アラブ系女性名。植民地支配下のアルジェリアではヨーロッパ人家庭に雇われた家事労働者の女性を、人格を無視して本名にかかわらず「ファトゥマ」と呼ぶことがあった。ここでは、当時の差別だけでなく、独立後も移民女性を安い労働力として使うフランス人への批判もこめて引用されている。

53 *Ibid.*, p.91.

54 ZOUARI, p.42.

55 *ibid.*, p.74-75.

配り、金持ちで幸せな女というイメージをつくりあげるために、フランスでの生活を犠牲にしてでも出費する母<sup>56</sup>を通じて、移民と出身社会との関係を見据えるまなざしがある<sup>57</sup>。

二つの文化の間で引き裂かれる、という決まり文句の内実は、本章でもその一部を見たように、性差という要因に大きく影響される場合がある。「私たち」と「彼ら（ホスト社会のマジョリティ）」の間にどのように「私」を位置させるか。男性の場合、「彼ら」の世界で成功することを「私たち」から期待されつつ、「彼ら」の差別によってそれが妨害されることが問題だとしたら、女性の場合、一方で男性同様「彼ら」の社会に統合することは期待されるのだが（特に学業の成功）、同時に、フランス人女性のように振る舞ってはならず、とりわけ性的規範に関わる行動においては「彼ら」に統合はもちろん近づくことすら許されない。「私たち」を危険にさらすのは、息子たちの失業や非行、犯罪以上に、娘たちの性なのである。我々のテキストは何よりも、現代フランス社会で生きる女性の「私」の位置のあやうさと困難を語っている。

#### 4 「性差別の人種化」と女性たちのテキスト

現在、二世女性の発言や行動がフランス社会で様々に解釈され、議論になっている。本論でも取り上げたベリルのテキストは、テレビを始め多くのマスメディアが輪姦の問題を取り上げるきっかけとなった。ほぼ時を同じくして「売女でもなく服従する女でもなく<sup>58</sup>」というグループが、パリ郊外でおきた若い女性の焼殺事件をきっかけに全国の行進（2003年）を行い、これまたメディアの注目するところとなった。これは、大都市郊外で育った移民家

---

56 ズアリの場合は母だが、イマシュでは父が、たとえフランスで子供たちが困窮していても、故郷に錦を飾るのは名誉の問題だとして優先させる。C.f., IMACHE, op.cit., p.14.

57 また、ズアリには、大人たちのいるところでは伝統と規範に全く従順であるように見える従姉妹たちが、監視の目を逃れたところで繰り広げる少女同士の性的遊戯を見て驚愕する場面もある (ZOUARI, op.cit., pp.42-43)。

58 “Ni putes ni soumises” 代表者 Fadela Amara による紹介がある。Fadela AMARA avec la collaboration de Sylvia Zappi, *Ni putes Ni soumises*, La Découvert, 2003. (ファドゥラ・アマラ、『売女でもなく、忍従の

庭出身の女性たちが始めた運動で、グループ名は、その前年パリ第4大学で行われた郊外出身女性たちの集会のスローガンの一つからきている。この集会は、およそそのような場所と縁のない女性たちがソルボンヌの大講義室で、主に、自分たちが日常的にさらされている性差別と暴力を告発する画期的なものだった。本論のテキストの著者たちと共通する経験をもつ女性たちが、自分たち独自の問題を社会に向けて訴え始めるといふこれまでにない事態に、フランス社会は、彼女らを犠牲者としてセンセーショナルに取り上げる。同時に、ただでさえ差別に苦しむ男性たちを加害者としていっそう窮地に追い込むものだという批判が現れる。女性たちによるこうした告発は、性差別や暴力の原因を、出自、文化、居住地域などに還元する危険があり、移民差別を助長するというのである。

社会学者のロラン・ミュチエリは、特に輪姦をめぐるフランスメディアの加熱ぶりを分析して、いくつかの問題点を指摘している。ミュチエリによると<sup>59</sup>、輪姦を、現代の移民が集住する郊外に特有の現象とみなすことは誤りである。フランスの歴史をみても、中世の昔からこの性暴力は存在してきたし、近いところでいえば、1950年代から60年代にかけて「黒いブルゾン」の若者たちによる輪姦が社会問題となった。またこれは、低所得者層に限った犯罪でもなく、加害者は各階層にまたがる。地域も限定できるわけではない。従って、現代のメディアが、「特定の郊外団地に住む移民家庭出身者による特異な犯罪」であるかのように言い立てるのは明らかに間違いである。

---

女でもなく』、堀田一陽訳、社会評論社、2006年5月）この運動については日本でも紹介されている。森千香子、「『売女でもなく、服従する女でもなく』フランス郊外の女性運動とその「政治化」」、『世界』、730号、2004年9月、242-249ページ。この名称は2002年のソルボンヌでの集会時から話題となり、拒絶反応も見られた。同じ郊外出身の男性を「女衞」扱いするのかというのである。しかし、本論のテキストを読む限り、ここでいう「売女」は、同じ郊外出身の移民二世世代男性を女衞扱いすることを意味するのではなく、伝統的価値観や性規範に基づいた生き方をする女性（これが「服従する女」の方であろう）以外を貶める表現に他ならない。こうした女性の二分法は、現代の移民社会に特有のものでは全くない。女性を「聖女（あるいは母）」と「売女」に分けるのはキリスト教社会においても長年の「伝統」であり、フランスにおいてこれがはっきり批判されるようになったのも、20世紀にフェミニズムの進展がみられるようになってようやくのことである。

59 Laurent MUCCIELLI, *Le scandale des « tournantes »*. *Dérives médiatiques, contre-enquête sociologique*, La Découverte, 2005. 特に34ページから38ページ参照。

ましてや、マグレブやブラックアフリカの文化がこうした犯罪を引き起こすかのような誤解を与える論調はそれ自体人種差別であるというミュチエリの主張は正しい。我々も取り上げたベルルは、一度も加害者の出自（民族、宗教、文化など）を問題にしていない。この傾向を批判することについてはフェミニストも同様で、『ヌーヴェル・ケスチオン・フェミニスト』誌は「性差別と人種差別 フランスの場合」という特集を組んでいるが、その中でクリステル・ハメルはマリー・トランティニャン殺害事件を例にフランス世論の「ダブルスタンダード」に切り込んで「性差別の人種化<sup>60</sup>」を批判する。郊外での二世世代男性による女性の殺人事件は激しい非難を巻き起こし、移民の文化的背景が取り沙汰されるのに、2003年に起こった女優マリー・トランティニャンがロック・ミュージシャンのベルトラン・コンタに殴り殺された事件は激情的な愛から生じた悲劇で、それを「フランス文化」のせいにする者はだれもいないとハメルは指摘する<sup>61</sup>。同じ特集号でクリスチヌ・デルフィも言うように「性差別と暴力は「カルチェ<sup>62</sup>と郊外」の専有物ではない<sup>63</sup>」のはたしかである。

では、本論で読んできたテキストは、「性差別を人種化」しているのだろうか。一つははっきりしているのは、現代フランスの「郊外恐怖」は9・11以降の「イスラム恐怖」と連動しているのだが（移民の集住する郊外はイスラム原理主義とテロリストの温床であるという「妄想」）、我々のテキストにイスラムはほとんど場所を持たないということである。祈る父親など、ほんのわずかに言及があるのみであり、たとえば、学校でのヴェール着用問題に関わる話は皆無である。その他、宗教を理由にした抑圧も全く姿を見せない。これらのテキストの世界は、少なくとも現代フランス社会の他の部分と同じくらい世俗化されている。

語り手たちの不満の集中する男女で異なる教育、行動制限、性規範などに

---

60 Christelle HAMEL, "La sexualité entre sexisme et racisme: les descendantes de migrant/e/s du Maghreb et la virginité", in *Nouvelles Questions Féministes*, vol.25, no.1, 2006, p.45.

61 *ibid.*, pp.44-45.

62 ここでの「カルチェ」は、移民の集住地域を指す。

63 Christine DELPHY, "Antisexisme ou antiracisme? Un faux dilemme", in *Nouvelles Questions Féministes*, vol.25, no.1, 2006, p.71.

ついてはどうだろうか。テキストの中でこれらが批判される時、当事者たちがそれを、民族や文化というカテゴリーでとらえているようには思われたい。彼女たちにとってそれはもっとはるかに身近、家庭内の日常生活に直結することがらであり、かつ切羽詰まった問題である。不満が生まれるのは、家庭外、つまり「フランス人」たちの社会で通用している価値観や規範と自分たちの家庭のそれとが異なるという認識があるからこそである。彼女たちはこの差異とそれのもたらす緊張を日常的に生きている。この緊張の存在を認めることは、ただちに人種差別、民族差別になるわけではない。上にも述べたが、彼女たちのテキストからは、女性に対して抑圧的な慣習に対する批判は読み取れても、それは両親の出身文化の否定などではない。両親がマグレブ出身であることに全てを還元しようとするものでもない。むしろ、これらのテキストは、緊張を生きる当事者たち自身の、その正体を見極めようとする試みなのではないだろうか。そこから見えてくるのは、「女性に抑圧的な文化」という一元的なカテゴリーではない。女子供の些細な日常の記述が、緊張は「マグレブ」の側からのみ来るのではなく、現代フランス社会にこそ生まれるのだという認識へと至る過程を、これらのテキストは示している。

暴力についてはどうか。輪姦といった極端なかたちでの性暴力は、ベリル以外には書かれていない。しかし、特に兄弟による姉妹への暴力の背景には、兄弟による姉妹の性の管理という第一世代の出身社会の慣習があることは否定できない。これを指摘することもただちに「移民二世男性は暴力的である」と一般化することにはならないはずである。上述の緊張と同じく、この暴力もまた、今、その男性たちが人種差別や失業にさらされるフランスで起きているのであり、原因は「背景」にのみ還元はできない。

ベリルを除きマスコミの過熱とは無縁の本論のテキスト群は、たしかに両親の出自、また移民という経歴が大きい意味をもつ様々な問題を、それを日々生きる当事者として「内側」から描いている。女性に対して抑圧的な慣習に対する激しい抗議もみられる。それは、しかし、マスコミがセンセーショナルに言い立てるような、文化の違いによる性差別・性暴力という方向へ向かうものではない。どちらの文化がより差別的かなどということよりはるかに緊急の、日々書き手たちの直面する内と外との緊張をいかに解きほぐすか、迂回するか、あるいは正面突破するかという実践的な問いかけこそがこれら

のテキストを支える。「売女でもなく服従する女でもなく」のような運動が、二世世代の女性たちに、家族や共同体を捨てて自己解放するよう呼びかけていると危惧する意見もあるが、少なくとも本論のテキストは、ベリルを含めて、家族や出自を否定しそれと訣別するために書かれているのではない。それらを理解しようとする試みなのだ。この書き手たちは、ジッドのように「家族よ、おまえを憎む」と言うのではない。多くを語らない第一世代の来歴を探り、そうすることで、現在の緊張を生きる自分をも理解しようとする。それは、告発である以上に、困難な現実を生きのびていくための戦略なのではないだろうか。生きるためのテキスト。ベリルはそのもっともわかりやすい例なのかもしれない。様々な条件が重なってマスコミの過熱をひきおこすことになったとはいえ、そもそも注目されるために書かれたのではない。むしろ、ベリル以前のこれらのテキストをふまえてベリルを読み直すと、それらをつなぐ一つの線が見えてくる。「書く娘」となることは、家族内や地域に現に存在する抑圧的慣習や暴力を理解し、批判する力を獲得することでもある。それがただちに解決策をもたらすわけではないにせよ、書き手たちは、外部に向けて発表されたテキストという「事実」によって閉塞状況の一端をこじあけているのである。

最後に問われなければならないのは、テキストを受け取るフランス社会にとってそれが何を意味するのかということであろう。ニニの語り手の、地域の指導員に対する憤慨は、彼女たちを取り巻くホスト社会に対するそれでもある。

証明しなくちゃならないのはいつも私たちの方。できることを示せて、言うのはそればかり。あの人たちの方は一体私たちに何を証明してくれるっていうの<sup>64</sup>。

カトリック教会の力が強いところから、今日のような状況（パクスやユニオンリーブルなど婚姻の相対化、婚外子差別の制度的かつ実質的消滅、多様な家族関係や性的関係の許容など）にいたるまで、比較的短期間に大きな変化を経験したフランス社会は、今新たに、移民二世世代の女性たちの問いかけを受け、「私のようになるよう努力せよ」ではない応答をする必要に迫ら

---

64 NINI, op.cit.,p.276-277.

れている。彼女たちのテキストが、緊張と渡り合う彼女たちの力量を「証明」しているとすれば、緊張を生み出すもう一方の当事者の方もまたそれに応える力量を試されているのかもしれない。

## 参考文献

### 使用テキスト

Farida Belghoul, *Georgette!*, Barrault, 1986.

Souâd Belhaddad, *Entre-deux Je. Algérienne? Française? Comment choisir...*, Mango Document, 2001.

Samira Bellil, *Dans l'enfer des tournantes*, Denoël, 2002 (folio document 2003).

Aïcha Benaïssa et Sophie Pouchelet, *Née en France*, Payot, 1990 (Press Pocket 1994).

Sakinna Boukhedenna, *Journal 'Nationalité: immigré(e)'*, L'Harmattan, 1987.

Tassadit Imache, *Une fille sans histoire*, Calmann Lévy, 1989.

Ferrudja Kessas, *Beur's story*, L'Harmattan, 1994.

Soraya Nini, *Ils disent que je suis une beurette*, Fixo, 1993 (Press Pocket 1994).

Martine El Nouchi, *Khadija*, Atlantica, 1998.

Fawzia Zouari, *Ce pays dont je meurs*, Ramsay, 1999 (Press Pocket 2001).

### その他の参考文献

Fadela Amara, *Ni putes ni soumises*, La Découverte, 2003.

Kristine Aurbakken, "Comment peut-on être français? Une imaginaire nationale en sursis", in Hafid Gafaïti, Patricia M. E. Lorcin et David G. Troyansky, *Migrances, diasporas et transculturalités francophones*, L'Harmattan, 2005.

Augustan Barbara, "Différenciation hommes/femmes dans les populations maghrébines immigrées", in Camille Lacoste-Dujardin et Marie Virolle, *Femmes et hommes au Maghreb et en immigration. La*

*frontière des genres en question. Etudes sociologiques et anthropologiques*, Publisud, 1998.

Chahla Beski, "Les difficultés spécifiques aux jeunes filles issues de l'immigration maghrébine: de l'observation à la méthodologie d'approche", Nadia Benticou ed., *Les femmes de l'immigration au quotidien*, Edition Licorne, Amien, 1997.

Charles Bonn, "La visibilité de l'émigration-immigration dans les littératures maghrébine, française, et de la «seconde génération» de l'immigration: quelle «scénographie postcoloniale»? ", in Hafid Gafaïti, Patricia M. E. Lorcin et David G. Troyansky, op.cit.

Chérifa Boutta, "Ma fille est un homme, ma fille est comme un homme", in Camille Lacoste-Dujardin et Marie Virolle, op.cit.

Mehdi Charef, *Le thé au harem d'Archi Ahmed*, Mercure de France, 1983.

Christine Delphy, "Antisexisme ou antiracisme? Un faux dilemme", in *Nouvelles Questions Féministes*, vol.25, no.1, 2006.

Narcia Guénif Souilamas, *Des «beurettes» aux descendantes d'immigrants nord-africains*, Bernard Grasset, 2000.

Christelle HAMEL, "La sexualité entre sexisme et racisme: les descendantes de migrant/e/s du Maghreb et la virginité", in *Nouvelles Questions Féministes*, vol.25, no.1, 2006

Laurent Mucchielli, *Le scandale des «tournantes» . Dérives médiatiques, contre-enquête sociologique*, La Découverte, 2005.

Nourredine Saadi, "Père et fille", in Camille Lacoste-Dujardin et Marie Virolle, op.cit.

「フランス暴動」、『現代思想』、臨時増刊号、青土社、2006年2月

森千香子、「「売女でもなく、服従する女でもなく」フランス郊外の女性運動とその「政治化」」、『世界』、730号、2004年9月